

Up or Over? と Don't die! 判らなかった英語

吉田 真人

もう50年ほど前のことになる。初めての米国出張で、中西部の田舎町にある Holiday Inn に泊まった。朝食をとるべくレストランに行くと、ウェイトレスの可愛いお嬢ちゃん（高校生のアルバイトだろうか）が出てきた。Orange Juice, Fried Eggs with Bacon & Coffee と注文すると、彼女が Up or Over? と言った。

確かに聞き取れたが、何のことかまったく判らなかった。質問をされているのだ、ということさえもわからない。彼女はもう一度繰り返した。当方が黙ったままなので、不思議そうにして行ってしまった。曖昧な微笑をしたままの不思議なサイレント ジャパニーズとあきれたのだろう。

後年、Up は Sunnyside Up（日本で言う目玉焼き）、Over は Turn Over（両面を焼いたもの、日本ではポピュラーでない）を指す事を知った。どちらにするのかを質問されている、これ自体を理解できなかった事に、恥じ入るばかりだ。

1984年春に米国出張の機会があった。丁度、民主党予備選挙の最中で、現職のレーガンに誰が挑むか、が争われていた。顧客訪問を終えフィラデルフィアのホテルに戻ると、入口に近いバーに大勢の人が群れている。ここに選挙事務所を構えていたゲアリー・ハートが、同州での敗北を認めたまさにその瞬間に遭遇したのである。悔しがる人、泣き出す人、ビールを呷る人等々で騒然としている。外から帰ったばかりの私達は、バーテンダーに向かい、何回も「ビールを呉れ！」と叫んだ。バーテンダーは、ハート支持者への対応でてんでこ舞いであったが、漸く当方の存在に気づきこう言い放った。

「Don't die!」

確かに「Don't die!」と聞き取れたが、意味がまったく判らない。

I'm dying for a beer. (死ぬほどビールが飲みたい!) という成句を知ったのは、ずっと後のことである。幸い喉がカラカラに渴いて干からびて死ぬ前に、ビールが来た。

(2024年9月19日)